か　わ　ら　版

（夏号 NO15 号）2018/0 7 /01 発行

年二回発行(1・7 月)

下関市立大学落語研究会ＯＢ会発行

大学同窓会のご厚意により創刊号（ＮＯ１）よりすべて閲覧できます。大学 OB の皆様にもお読みいただければ幸いです。

編集長　　西川　隆喜

若き日を思ひ起こせばことさらに

無駄に暮らせし己が人生　　(NO 8.１６９)

(直訳) 私の人生を振り返れば、実に無駄な時間を費やしたものだとつくづく考えさせられる今日この頃であるよ。

亀山八幡宮

関門トンネル人道

『暑中お見舞い申し上げます』

下関市立大学落語研究会 OB･OG の皆さま暑中お見舞い申し上げます。さて、サッカー・ワールドカップの熱い戦いを除けばさして興味深い事柄は国内外を見渡しても見つけることがない。オリンピックやサッカーなどは所詮余興であり、こんなことに日本国民が浮かれているようでは一等国の値打ちを自ら捨てるに等しいことだと編集長は考えています。戦後 70 年以上を過ぎて、経済発展を遂げてきたことは事実としても、国民一人ひ

とりの「生きる力」は子どものみならず大人までも相当弱体しているようである。不謹慎を断ったうえで一例をあげれば日本全土に発生する多くの災害などに遭遇した人々の「国だのみ」の風潮もとどまるところを知らない。地域自らが「自ら復興」のため努力することがなにより必要なことであろう。この国は「どのような国を目指しているのか？」、保守系・革新系の政党を問わず「大きな国（何でも国家が国民の欲するものを提供する意味）」を目指しているようである。本来、保守政党は「小さな国（防衛・教育・医療程度を提供する意味）」を目指すもので、選挙目当てでこんなことをし続ければ、一億総乞食の国民が国土に満ち溢れる日も近いのではないだろうか。大学に関しても、少子化の影響で国公立・私立を問わず定員割れと、それに伴う財政悪化で大学そのものの運営が成り立たないケースが増大している。地方自治体では「泣きつかれた私立大学を公立化」することにより、「地域おこし」に利用する事案も散見されるが、軽い思慮でのこの手の救済は、「教育の機会均等というよりは地方自治体による貧困ビジネスの助長」となりかねないことを肝に命じておいてほしいものである。（編集局）

『つれづれなるままに』

つれづれなるまゝに、日くらし・・・・というか、ある春の暁に目が覚めて眠れず（歳のせいで）ふと先日の落研の懇親会を思い出し、昔を懐かしんで、５０年あまり前のことを微かな記憶を元に終活の一部として書いてみました。おそらく２００人余りの卒業生のなかで、何人の後輩がこの『かわら版』を読まれているか分かりませんが、５０年近く切れることなく続いている奇跡のような落研の草創期について、薄れゆく記憶の中でおぼえていることを書き記したいと思います。
わたくし笑司が、このきちがいじみた集団の中に身を置くことになったいきさつは、入学した年のある日（いつだったかはよく覚えてない）市大の中に下商出身の同窓会があって、その席に笑和（尼子）が出席していました。彼はその前に楽狂（細井）と落語研究会という同好会を設立しており、部員を勧誘していました。その席上で顔を知っている同学年の金艶（大塚）笑司（沖井）圓さん（浅海）を釣り上げ、この五人が創立期の中核となって活動を始めました。北九州大学の落研の先輩方や九落連の参加大学の諸先輩方に教えを受け、２年生の馬関祭で初めて馬関寄席を開きました。
芸名はビンビンにギラギラしている時代でしたので、春を好む春好亭・痩せっぽちの２人があばら家・もう一つくらい欲しいなというので花見亭をつくり第１回目の寄席が誕生しました。何にもない金もない中での開催でしたので、屏風をどうしようと言うことで、たまたま家にあったふすま４枚に、遠

くから見たら分からないだろうと、色紙の金色を貼り付けて無事、出来上がりました。思った以上の出来栄えに一同大喜びでした。
手作りの高座も毛氈を敷き大きな座布団を置けば立派な高座になります。見出しの寄席文字も楽狂が見よう見まねの独学で作成、卒業時の提灯の文字は見事なものでした。その頃、笑司の友人で東芝に勤めていた本多くんにスポットライトを手配してもらい何とかそれらしいものが出来上がりました。
それ以来本多くんと落研との付き合いが今でも続いています。電気関係、車の調達、ありとあらゆる助力を得て寄席の開催が出来ました。
何番教室だったか大きな教室に高座をつくり、学内の学生、市内在住の友人家族、九落連や門司看護学校の仲間を呼んでの晴れ舞台でした。
初めての高座はとても緊張しました。間なんてとんでもありません、覚えているうちに喋ろうと早口にただ喋るだけの高座で、はっきり言って何も覚えていません、あの時は発起人の数合わせで参加してもらっていた工藤氏や渡辺氏にも高座や大喜利にあがってもらったように記憶しています。
中入りで大喜利を初めてやり、お題をもらってのなぞかけもなんとかこなしトリまでこぎつけました。トリは誰だったか覚えていません。
寄席のあとの他大学の落研をまじえての反省会、打ち上げの飲み会、すべてが初めてのことで、達成感というよりは、ただただ必死で、正直ほとんど覚えていません。ただ、第１回目の寄席が市大落研の第一歩であったことは間違いありませんし、それが延々５０年も続いていることに、ただただ驚いています。
メンバーは一年後輩の朝珍が入っていたと思います。翌年の新入生勧誘で５人その次が６，７人と増えていきクラブとしての体をなして行きました。
一番嬉しかった出来事は、四回生になった年に、なんと同好会から部に昇格したのです。我々が卒業するまでに、こんな短期間で部に昇格できるなんて思ってもみなかったことでした。
やはり、一年間に新歓寄席、納涼寄席、馬関寄席と定期的に寄席を行い実績を積んでおり、他にも老人クラブの慰問や山大の大学祭に出演したり、北九州落語長屋への出演、九落連寄席への出演等をこなし、新聞社に働きかけを行い、記事にしてもらったり、寄席のたびに新聞社や教育委員会から後援をもらったり、幅広く学外へも積極的に働きかけをおこなっていたこと、人脈をフル活用したことが良かったのではないかと思います。
そして卒業の年には第１回の追い出し寄席を行うこととなりました。１年間で最後の４番目の寄席である『追い出し寄席』です。４年間の集大成とも言える寄席に学外の婦人会館で２００名以上の観客を集めて盛況のうちに、完璧に近い寄席をうつことが出来ました。無理やり顧問になっていただいた先生や面倒を見てもらった３人の教授にも出演してもらい、毛因頭亭春平太・恐妻亭小勝・

オマリー神父という芸名をつけてもらい１席ずつ噺をしてもらいました。教授方の熱演に大きな笑いと拍手をいただき、落語って本当にすごいなと改めて思いました。
後輩の皆様には、看板作りや市内の唐戸や東駅まで、夜、電柱やガードレールに針金で結びつけに出かけたり（今だとこっぴどく怒られていたことでしょう）チケットを販売したりと本当にご苦労をお掛けしました。有難う御座いました。そのお陰で落研は５０年近く存続しています。我々創世記のメンバーにすれば本当に奇跡に近いことです。
今は少し中身は変わってきているようですが、何年か前に追い出し寄席を見に行った時に新しく部長になる人が部員が少なくなってきたので、どうやったらいいだろうかと悩んでいました。それはそれで、その時々の時代の流れのなかで出来ることをやって行けばいいのではないかと思います。皆さんの頑張りは結果としてちゃんと残っていきます。後輩のみなさん有難う、心からお礼申し上げます。
楽しい落研がこれからも続いていくことを祈りながらペンを置きます。

あばら家　笑司（沖井　孝志）

『青春の臭い』

ゴールデンウィーク明けの久しぶりの仕事で疲れ果てた五日間を乗り切り、やっと安息を得た週末に、「大いに『青春』しょう」というステレオタイプな標語で集まった十二名のおじさん達は、同じ臭いがしていた。そう、私が大学時代の四年間、どっぷりと浸かっていた、下関市立大学の落語研究会に漂っていた、あの臭いである。ここで臭いと表現されているものは、辺りを漂う雰囲気といったもので、集合場所の河内長野荘のロビーに居た、他のお客さんには感じ取れなかっただろう。この様に表現すると、全くどの様な事か、分からないだろうから、的を得ていない可能性も有るが、あえて解説してみよう。集まった獣達は、自分の持っている情報と知識に、対象となる獲物のその場での言

動を加えて、言葉による攻撃をかける為のネタが出て来る瞬間を待っている。まるで小型の肉食動物が、獲物が目の前を通るのを待っているような雰囲気と言えば一番近いだろうか。ただ、実際の獣達と落研の珍獣達との違いは、決して獲物を殺さない事だろう。その場の雰囲気を盛り上げる事が目的で、獲物には再びネタを提供してもらう必要が有ることを理解し、その一瞬を楽しむ以外のことは望んでいないからである。

ゴールデンウィーク明けの久しぶりの仕事で疲れ果てた五日間を乗り切り、やっと安息を得た週末に、「大いに『青春』しょう」というステレオタイプな標語で集まった十二名のおじさん達は、同じ臭いがしていた。そう、私が大学時代の四年間、どっぷりと浸かっていた、下関市立大学の落語研究会に漂っていた、あの臭いである。ここで臭いと表現されているものは、辺りを漂う雰囲気といったもので、集合場所の河内長野荘のロビーに居た、他のお客さんには感じ取れなかっただろう。この様に表現すると、全くどの様な事か、分からないだろうから、的を得ていない可能性も有るが、あえて解説してみよう。集まった獣達は、自分の持っている情報と知識に、対象となる獲物のその場での言動を加えて、言葉による攻撃をかける為のネタが出て来る瞬間を待っている。まるで小型の肉食動物が、獲物が目の前を通るのを待っているような雰囲気と言えば一番近いだろうか。ただ、実際の獣達と落研の珍獣達との違いは、決して獲物を殺さない事だろう。その場の雰囲気を盛り上げる事が目的で、獲物には再びネタを提供してもらう必要が有ることを理解し、その一瞬を楽しむ以外のことは望んでいないからである。

ゴールデンウィーク明けの久しぶりの仕事で疲れ果てた五日間を乗り切り、やっと安息を得た週末に、「大いに『青春』しょう」というステレオタイプな標語で集まった十二名のおじさん達は、同じ臭いがしていた。そう、私が大学時代の四年間、どっぷりと浸かっていた、下関市立大学の落語研究会に漂っていた、あの臭いである。ここで臭いと表現されているものは、辺りを漂う雰囲気といったもので、集合場所の河内長野荘のロビーに居た、他のお客さんには感じ取れなかっただろう。この様に表現すると、全くどの様な事か、分からないだろうから、的を得ていない可能性も有るが、あえて解説してみよう。集まった獣達は、自分の持っている情報と知識に、対象となる獲物のその場での言動を加えて、言葉による攻撃をかける為のネタが出て来る瞬間を待っている。まるで小型の肉食動物が、獲物が目の前を通るのを待っているような雰囲気と言えば一番近いだろうか。ただ、実際の獣達と落研の珍獣達との違いは、決して獲物を殺さない事だろう。その場の雰囲気を盛り上げる事が目的で、獲物には再びネタを提供してもらう必要が有ることを理解し、その一瞬を楽しむ以外のことは望んでいないからである。今回のＯＢ・　ＯＧ会に集まったメンバーは、落語研究会創設に携わ

った９期の卒業生と、その落語研究会を潰す事なく育て上げた１３期の卒業生が中心で、１３期の先輩方と同時期の在籍した１４期の先輩までがレギュラーメンバーの様であった。それに今回、初参加組として、地元に近い１５期の先輩が幹事の補助として参加し、そして２２期の私が参加した。私が大学時代に接していた１９期の先輩方も過去には参加した事が有る様だが、今回は参加できず、１５期から２２期まで大きな断層が有った。実際に参加してみて少し驚いたことは、９期の参加者の中には、創設時から部外者ながらも活動に協力してくれていた方々も参加されていた事だろう。その様な多くの人に支えられて、今の下関市立大学の落語研究会が有る事を強く感じる事が出来た。また、今後もこのＯＢ・ＯＧ会を続けていく為には、今回初参加で少し浮いていた私を基準にして、上と下の方向へ各々新しい参加者を募っていく必要が有る事を強く感じた。

懇親会が始まっても、落語研究会らしい、小型肉食獣のような会話は続き、その様な空気感の中に、久しぶりに浸れる懐かしさを充分に味わう事が出来た。ただ、二つほど学生時代と大きく異なる部分も有った。まず、お酒の量が極端に少なくなっていた事だ。私の記憶している、マイバケツ持参の落語研究会の飲み会からの進化形とはとても思えない。そして次に、泊まる部屋で行われた二次会のお開きの時間が、極端に早くなっていた事だろう。この辺りも、やはり年齢には逆らえない部分を感じた。変わっていた部分も有ったが、根本的な空気感に大きな変化は無く、今の自分を形成している重要な一時期の雰囲気を再確認する事が出来た、楽しく有意義な一夜だった。

追伸：梅光女学院短期大学の落語研究会ＯＧの阿蘇様から、青山先輩宛に送られて来た棒ドーナツを、おすそ分けしていただきましたが、すごく美味しかったです。是非、次回の下関での開催時には直接お礼を言いたいと思いますので、阿蘇様、必ず御参加下さい。

河内長野風薫るの夢一夜

あばら家　喜棚　（今井　浩嗣）

『現役・落研部員の様子』

過日に開催された河内長野のOB会には出席できず　残念でした　(ノД`)ｼｸｼｸ…

ところで、OB会かわら版編集長(朗志氏)から　「現役落研部員の活動をしらせよ」とミッションがくだりました。

で、花見亭ハーブちゃんに問い合わせたところ、twitterで活動を広めてるとのこと。 みなさま、お時間あれば　「下関市立大学　落研」で　検索してみてく

ださい。５月２６日の新歓寄席の様子がわかりますよ。　一人ひとり高座に上がった写真も含め、くわしく出ています。
また　６月１０日長府庭園で無料寄席をするというので、行ってみようと思います。そして、現部員と話ししたこと　お伝えしますね。

下関支局　　花見亭　たゆう(千葉　里美)

『編集後記』

まず、「かわら版ＮＯ１５号（夏号)」は編集長の体調不良や何やらで、原稿等は集まっていたのですが、発行が遅延したことを心から読者の皆様にお詫びいたします。

過日、開催された「河内長野ＯＢ会」に参加いただいた会員の皆様もそれぞれにお年を重ねられているといった様子がうかがえました。第一回川棚温泉でのＯＢ会（12 年前）では、深夜まで酒を酌み交わし、よもやま話も尽きることはありませんでしたが、今では午後 11 時になればほとんどどの部屋も消灯といった状態で、無理はしないＯＢ会を露呈していました。

参加者の皆様はじめ国の内外でお住いのＯＧ・ＯＢの皆様も生きている限り様々な労苦はあるとは思いますが、これからもお元気にご活躍いただければ幸いです。そして、2 年後に下関で開催されるＯＢ・ＯＧ会でお会いできることを心より願い、編集後記とさせていただきます。　（編集長）